

森次郎の心理学的考察

心理学者エリクソンによれば、人生は八段階に分けることが出来ると言う。生まれてから一歳までを乳児期、ここで親の愛情を充分受けられれば基本的信頼感が育ち、社会や人を信頼することが出来るが、愛情を受けられなければ不信感が植え付けられてしまう。三・四歳までを初期幼児期、ここで自律性が育ち、五・六歳までの幼児期で自発性が育つ。続く児童期で勤勉性が、これは学校や友人との協調によって培われ、青年期では自己のアイデンティティーの確立を目指すと同時に忠誠心が育つ。若年成人期で生涯の仕事に就き、結婚し家族を持つなどして、他者との親密性を身に付け、自己と他者を尊重する形での愛情が持てるようになる。壮年成人期で子供や弟子を育て、最終段階での老年期には、自我統合性を、これは何ものにも代えられない自己の人生として、自己の生き方を肯定できるかどうかの問題になり、肯定できた場合には智慧という精神的遺産を次世代に残す事が出来るのだ。

これらを踏まえ、森次郎の人生をたどってみたいと思う。

「海に鳴る碑」での書き出しが、物心のついた4歳ぐらいの次郎の心境から書かれているため、乳児期、幼児期初期がどのような様子だったのかが判明しないが、その成熟した宗教者のような老年期より容易に想像することが出来る。なぜなら十分な愛情を受け基本的信頼感や希望の心が培われ、自律性をもその時期育たなければ、そのような老年期は無かったであろうと思うからである。しかし、その後の幼児期で次郎は親に捨てられてしまうのである。

では、現実ではどうだったのか。梶川様の書かれた「芹沢光治良の世界」では、ご兄弟方が芹沢先生は捨てられたのではなく、自分から進んで祖父の元に残ったのだと、おっしゃっているようだが、事実は芹沢先生が一人取り残されたという事だけであって、その事実を本人がどう受け止めるかで、その人の真実が生まれるのだと思う。芹沢先生は淋しさや辛さから捨てられたと思い、ご兄弟方はひもじさからの嫉妬によってか、先生は自分から残ったのだと主張したのではないか。従って芹沢先生にとっての真実は、親に捨てられたという事に他ならない。

では、捨てられた次郎の精神成長はどのようになったのか。母性愛への欲求は祖母によって満たされたであろう。しかし、父性愛への欲求は満たされる事はなかった。しかも、この時期培われるものにフロイトの言う超自我がある。これは父親への尊敬・愛憎から、父親の役割である価値基準や規範を自分の中に取り込むことであり、それによって、内なる父親として社会規範を示す超自我（良心）を得るのだが、父親がいないために、祖母の語る神の規律が超自我（良心）となり、極めて厳格な他律的道德として、働いたので

はないか。

大山元帥邸の敷地で禁じられていた落ち葉かきをしていたところ、大山元帥夫人に呼び止められ、「待っていなさい」という言葉に、他の子供は皆逃げたが、次郎少年は一人殴られる事を予想しながらも、約束したからとじっと待ったという箇所は、父親の規律を神の中に求めたために出来た厳格な超自我の為せる業としか言いようがない。

そしてその後の、中学進学によって神を捨てたと言うが、この超自我は良心として一生、次郎を律していったのであろう。

しかし、この時期、自分の将来と同一視し目的志向性を持ち、自発性を育てるために必要な両親がいなくなったことにより、身近な目標という点では見失ってしまった。

そして児童期、この時期、学業に秀で、村の子供と付き合いながらも、話の合う町の子供とも交友を深めているが、何より村という集団の一員として親がいなくとも認められ、他者との協調性を学んでいくこととなる。

しかし、その後の進学と同時に、村八分になってしまった。

親に捨てられ、村という集団からも疎外され、二重の孤独を抱え青年期を迎えることとなるのである。

では、その影響はどこに出ているのだろうか。

確かに、漁師にはならないと進学し、地域環境に縛られることなく、自分の意志希望を貫いて行くように見えるが、親という身近な目標を欠いたことにより、一見自由のようだが、その反面、辛い孤独が感じられる。

まずなにより、アイデンティティーを確立する青年期に、最も愛されるはずの親に捨てられた自分とは何か、と言う思いから自分を卑下するようになるのではないか。

「人間の運命」その他の作品にも、一高時代、「貧しいからこんな扱いを受けるのか」、「貧しさからの性格からか」、等の言葉が有るように、貧しいことで自分を卑下しているが、それにもまして、親に捨てられた事での自信喪失が影響しているのではないか。

又、罪悪感もあっただろう。自分は親に捨てられるほど悪い子供だったのか、と言う思いを抱くであろう事は容易に想像がつき、「海に鳴る碑」にも、そのように書かれている。これは親の方が悪いと親を恨む以外に、幼い子供には解決のしようがない心理であり、と同時にその心理に付随するように、天理教と言う組織に対しても反発を感じることは、致し方ないことであると思う。

そして、中学進学も「社会の裨益となる人になりたい」という思いがあった為でもあるが、この社会とは、まず第一に貧しい村の生活が念頭にあったはずで、いわば忠誠心を持って取り組もうと思っていた相手から疎外されたと言う

ことは、根深かったのではないか。

それは、晩年まで我入道との和解がなかったことや、いろいろな作品に村八分のことが書かれていることから察せられよう。

又、この時期は科学的知識を得る事によって、宗教に懐疑的にもなる。

奇跡をも科学によって解明できると思うのであろう。「男の生涯」にも「信仰の中にある驚嘆すべき事柄を、極めて皮相な理智から批判して、安心していただから。」と書かれている。しかし、神は否定しても幼い頃身につけた、超自我としての神の規律は色あせることなく依然、次郎の良心として不徳を嫌悪し遠ざけるのである。

忠誠心としては、やはり社会のためになりたいという思いが強く感じられる。村八分になり村への貢献は出来ないが、幼少期の罪悪感、自分は親に捨てられるほど悪い子と言う思いが、自分は皆を犠牲にしたと言う思いにつながっていき、自分の代わりに漁師になった買われた子供、自分を漁師にしようと育ててくれた叔父、皆の犠牲の上に自分があるという罪悪感から、その償いとして社会を裨益する人にならなくてはと、自身の希望をも押さえることとなり、この時よりモラトリアムが始まるのである。

モラトリアムとは、自分の職業上のアイデンティティーの確立が定まらない場合の一定の期間のことであるが、次郎は自己の内なる欲求を見つめることなく、農商務省に就職し仕事に打ち込むが、結局ここでは自己の希望をかなえられないと悟る事となる。この時の自己混乱感がフランス留学につながっていく。

そして、加寿子との愛が大きなポイントとなるのである。10代の愛は相手の中に自己のアイデンティティーを求めるとあるように、次郎は加寿子の中に自己を求め、こうあらねばならないと理想化していった。まさに理想の女性であって生身の女ではなかった。この交際も齒がゆいほど自己主張をしない。これは、自分に自信がない、親に捨てられた為の自信喪失と自発性のなさ、自己卑下の表れではないか。

その後、次郎は節子という生身の女と結婚するが、この時お互いにアイデンティティーの確立がなされていなかったように感じられる。節子は自分の我が儘で相手を縛ろうとし、次郎も自分の思うようフランス留学を満喫する。そんな二人の間に親密性を感じる事は出来ない。

しかし、ここで大きな変化が起こる。それは結核である。

オードヴィルでの結核療養は、まさに青年期のイニシエーション儀礼に重ねることが出来るのではないか。

今までの環境から隔離され、文字通り死と再生を経て、作家になると言う今まで自分が抱いていた希望を実現させる決心をするのだ。

この時、森次郎のアイデンティティーは確立されたのであろう。

(ちなみに、節子は敗戦が大きくその成長に関わっているよう思う。)

このアイデンティティーの確立とともに、神も自然宗教として蘇る事となる。

次郎は作家として社会に裨益する存在になるが、その後の両親を認める感情の変化や我入道との和解等については、アイデンティティーの確立もさることながら、親しい者の死や作家としての地位など他に多々要因が関わっていると考えられる。

そして、その老年において、人を愛する力、他者への慈しみ、人生世界宇宙に対する深い洞察等、成熟した宗教者の特色を兼ね備え、自己実現したことは疑いようもなく、晩年の神シリーズは神秘体験の表現に他ならない。それはまた、私達次世代に送られた、偉大な智慧という精神的遺産でもあるのだ。